Goshin Moro
Supporters Club News Letter

06

茂呂剛伸後援会 会報

2017/09

GOSHIN MORO
LIVE
Collaboration entre le taiko Jomon et le piano
Jeudi 6 juillet a 18h30
Maison de la Culture du Japon à Paris

Le tambour Jomon de M.MORO transperce la noirceur du monde et représente "l'instrument de la vie" qui aspire à l'harmonie entre les peuples. M.MORO mélange et unifie "la terre" des ruines Jomon ou autrement dit "la terre" où habite encore aujourd' hui le sang et la chair des gens de Jomon. Il tend du cuir de cerf euo sur les tambours et fait naître les tambours Jomon.

Le concert en association avec le piano sera sans doute un concert dont le formidable son transpercera le temps et l'espace. Et pas uniquement cela. Pour en dire plus, ce concert transpercera le futur et "une nouvelle forme d'art" sera assurément offerte au public.

Taiko Jomon, jouée: MORO GOSHIN Le 18 Mai 2013, nous avons fait un concert au temple Izumo pour célébrer les 40 ans de sa restauration. Au travers "Au concert de taiko Jomon et de sa fabrication" nous sommes des interprètes qui effectuent des activités de diffusion de la splendeur de la culture Jomon dont sont fiers les Japonais.

Compositeur, pianiste: FUKUDA HAJIME Musicien qui a fait fructifier son art au travers de ses voyages dans le monde

SAWAKIDE SHOW SENDA SEJI-SATO YUKA-TAMAMOTO YOSHITO-KAWAMURA JYORO-TAKANO AIAM/JIM TETSUJI

Contact: moro-t@mirai-t.com

■PETITE SALLE (rez-de-chaussée) TARIF 10€ / RÉDUIT 7€ / ADHÉRENT MCJP 5€ ■RÉSERVATION www.mcjp.fr

■Book tickets: contact@mcjp.fr ■チケットご予約はパリ日本文化会館へ、お問い合わせはこちら contact@mcjp.fr までお願いいたします。チケット・教室等のご予約・ご購入は、当サイトとそのオンライン予約・購入のほか、当館窓口及び電話 +33(0)-44.37.95.95 でも受け付けております。

■VENIR À LA MCJP パリ日本文化会館 Maison de la Culture du Japon à Paris ■住所：101 bis, quai Branly 75015 Paris, France
■最寄駅：メトロ 6 番線 Bir-Hakeim（ビラケム駅）RER C 線 Champ de Mars-Tour Eiffel（シャン・ド・マルス・トゥール・エッフェル駅）
■開館時間：火～土曜日 12 時～20 時 ■URL: www.mcjp.fr/jp/agenda/genres=spectacles

Ambassade du Japon en France
在フランス日本大使館

2017年7月。茂呂剛伸、念願のパリ公演実現！……ここに至るまでには、長い道のりがありました。企画が始動したのは2年前の春。同年秋の公演に向けて動いていた最中に発生した同時多発テロにより公演は延期。しかしその後も粘り強く活動と準備を進め、昨年夏にも準備のため渡仏。そして今年、たくさんの皆様のお力添えのもと、実現の時を迎えました。

at PARIS 2017

在フランス日本大使館の後援を受け、これまでにもサポートを頂いている北の縄文道民会議をはじめとする北海道の関係者の方々のご協力のもと、公演とともに縄文遺跡からの出土品複製、そして縄文太鼓の展示も同時に開催しました。北国に花開いた縄文の文化を普遍的なものとして現代、未来につないでいく私たちの活動はこれからも続きます。
現地から届いた公演と展示の様子を、写真並びに茂呂からのご挨拶とともに誌上でもお楽しみください。

Exhibition

公演と展示はともに、パリ日本文化会館で行いました。ここはフランス国民に日本の文化や芸術の情報を発信する、国際交流基金が運営する施設です。北海道の縄文～続縄文文化をパネルで紹介するとともに、南茅部で出土した中空土偶(複製)、そして、縄文の文化に思いを馳せ創製した「縄文太鼓」をご覧いただきました。

LIVE

セーヌ川とエッフェル塔…フランス、パリの文化を象徴する光景の近くにあるパリ日本文化会館。たくさんのお客様をお迎えしての演奏会が実現しました。パリ市民の皆様の聴く姿勢に触発されました。
音質、展開、コンセプトなど細部まで受け取って頂ける素晴らしいお客様でした。本当に本当にやった甲斐がありました。

茂呂より皆様へ、
ご報告とお礼のメッセージです。

日頃、縄文太鼓の演奏をお聞き頂けてとても嬉しく思っております。
さて、ご報告ですが、今年7月6日、在フランス大使館後援を受けてパリ日本文化会館で縄文太鼓の公演を盛会に終えることが出来ました。終演後の鳴り止まない拍手に、未来に繋がる大きな大きな手ごたえを感じました。
沢山の皆様のお力添えを頂き初公演にして満員御礼となりました。
演奏会後も、ご来場頂いた皆様と交流出来て、縄文太鼓にも触れて頂き、縄文文化への興味の高さを伺えました。
また、同時開催した国宝中空土偶複製(カックウ)展示会にも、沢山のご来場を頂きました。
フランスの皆様に、縄文文化をお伝えすることが出来て本当に幸せでした。

縄文太鼓のフランス公演を企画したのは2015年春のことでした。
2015年11月20日にパリでの縄文太鼓演奏を予定しておりましたが、11月13日に起こったパリ同時多発テロによって、延期を余儀なくされ、言葉にできない悔しい悔しい思いを致しました。その後も、フランス国内でも幾度のテロ行為が続きましたが、パリ日本文化会館や在フランス日本大使館との協議を重ねて今回の実現となりました。
パリ公演実現には、沢山の皆様のお力添えが御座いました。この場をお借りして御礼申し上げます。
ありがとう御座います。

また、今年8月にはユネスコの世界文化遺産認定を目指す「北海道・北東北の縄文遺跡群19ヶ所(関連資産含む)」全遺跡を巡り、管理者の許可を得て全遺跡の土の採取を終えることが出来ました。各遺跡では学芸員の方々から遺跡に関する説明を受けることが出来、縄文文化の魅力を再確認し、ユネスコの世界文化遺産認定の重要性をより強く感じました。
これから、全ての遺跡の土で縄文太鼓を制作し、その響きで北海道・北東北の縄文遺跡群を繋げ、機運を盛り上げることに少しでも寄与出来れば嬉しく思っております。
これからも、北の縄文文化を道外・海外に向けても発信して参ります。引き続き、応援頂ければ幸いです。

茂呂 剛伸

インタビュー vol.6
《特別編》

多面体の『美』をかたちに

札幌時計台ホール公演
『盲目のサロルンカムイ』
クリエイターズトーク

橘 春香さん ― 鈴木明倫さん ― 福田ハジメさん ― 茂呂剛伸

画家／絵本・童話作家　ダンサー　音楽家・DJEMP(ピアノ)

司会・撮影・構成　ウリュウ ユウキ

踊ること・描くこと・鳴らすこと 表現の多彩で深いかたち

・・・2017年9月、茂呂さんは2回目となる札幌時計台ホールでの一週間公演を、多彩なアーティスト／クリエイターを迎えて開催されます。本公演のための作品『盲目のサロルンカムイ』では、ダンス、音楽、そして美術が一つの舞台に会し、中でも鈴木さんは一人七役の踊りに挑まれます。いくつものテーマが重なり合いながら一つの舞台になっていくという表現体験をされるにあたって、皆さんそれぞれの発想の原点となる考えや、かたちを変えていく中で変わらない表現の核となっているものについてお聞かせください。

茂呂剛伸　『盲目のサロルンカムイ』は、一人では、一つのジャンルでは生み出せないことを、多ジャンルの美を追求するアーティストが集い生み出すことによって、そこで何が生まれるんだろう、化学反応するんだろう?という発想と、一週間同じ時を過ごす表現者から、予測できるものでなく何が生まれるかというワクワク、ドキドキがその原点です。

鈴木明倫さん　素敵な皆さんに集まっていただいて、題材も北海道や自然であったりして、僕らにしかできない表現を大前提に作っていき、またダンサーでしかできないものをと考えた中で、ただの動きにならないように、今回のテーマや思想……鶴だったら鶴の生態を落とし込んで調べてみると、いろいろな知らなかったことがありました。旭川まで鶴を実際に見に行ったらイメージの動きと違ったりもして。動きをただなぞる／模写するだけではなくて、鶴の背景や自然の流れ、その中にあるエネルギーをダンサーとしての抽象表現を交えて行き来できたらなぁと考えています。

橘 春香さん　普段私は絵本作家や童話作家をしています。自分がお話を考え、絵をつけ、自分の中で世界観を自己完結してゆく流れがあって、その世界観は個性なので表現の核として変わらない部分だとは思うのですが、今回はダンスや音楽の方々と一緒にやることで全然違う広がりを感じています。大好きなDJEMP(ジャンピ)の音楽を聴いて、鈴木さんのダンスを拝見して、そこから絵を起こすという作り方をしているので、相互作用がすでに起きていて。なおかつご褒美のように、最後に7日間の公演で私が関わらせていただいた世界が動いて見える喜びが待っている。そのことをとても楽しみにしています。自分が描いて終わってしまったもの、紙という二次元のものではなく、そこからさらに三次元に、ご一緒している皆さんの心を通し、濾過されて、より美しくなって出てくるものを、ものすごく楽しみにしています。

福田ハジメさん　北海道で創作活動を深めていく中で、アイヌ文化と続縄文文化に触れ、自分の表現と織り交ぜる機会をたくさんいただきました。
異文化と交流する時というのは、お互いが最も信じるものをまっすぐ相手に投げかける必要があります。ピュアな問いかけに瞬時に答えていくスリリングさ……それは少し大げさに言えば決断の連続でもあります。その積み重ねの集大成として舞台の原案を考え、そのための音楽を作曲したいと思いました。

『盲目のサロルンカムイ』が生まれるまで

・・・今作『盲目のサロルンカムイ』は、どのようにして生まれたのですか。その着想となったきっかけや、一週間をかけてかたちにしたいもの、ことはなんでしょうか?

茂呂　このメンバーと一緒にやったら必ずおもしろいものが生まれると思っています。福田さんと音楽を作る中で、今回は鈴木さんのダンスとご一緒したい、しかも北海道を題材にという中で、北海道の鳥であるタンチョウヅルで何をどう表現できるだろうという中で、ストーリーが必要だと。その時に橘さんにストーリーをご提供いただいて、"パラレルワールド"という枠組みが出てきました。私は"きっかけ"であって、唯一私が描いているのは、この地から発信できるものを作りたい、風土=風と土から感じられるもの、感性で磨かれたものを一つの集合意識としてアートで表現したいという思いで作っています。

橘　私は少し遅れての参加だったのですが、『盲目のサロルンカムイ』というものをやります、というお話を最初の打ち合わせで聞きました。美を追求してゆく鶴＝サロルンカムイのお話です、というのはすでに原案として決定していました。そこからどう絵をつけたりデザインを起こしましょうか、という最初の打ち合わせの時に、茂呂さんが「7日間同じことをするのではなくて、ちょっとずつ変化するような、テーマは同じなんだけど毎日違うことをやりたい」とおっしゃられたんですね。そうであれば、"お題"のように、お話を提供したらおもしろいんじゃないか、ということになって。「生

＊サロルンカムイ=アイヌの言葉で「(タンチョウヅルに顕現される)湿地に住む神」。

きる」ということ自体は常に変化している、同じ人なんだけど、同じことをやってるんだけど、いろいろな環境の中で違う人生があるというのは、DJEMPの即興の音楽や鈴木さんのダンスとも重なるなあと思って。それで、パラレルワールドをテーマにやったらいいのではないかと思ったわけです。ストーリーを作るにあたって、どうして"盲目"になってしまったのだろう、どうして美を追求することになったのだろう、と考えて、その心の流れを7通りの物語にして提供しました。

・・・ダンスも多分に即興的な表現の要素があります。リハーサルでは鈴木さんが即座に鳴らされる音を吸収しながら身体で表現する姿を拝見しました。7つの主人公を一週間かけて形にされる思いは何でしょうか。

鈴木　いろいろなジャンルのダンスをやってきましたが、ここ数年一番おもしろいと思っているのが即興なんですね。即興はその場で起こる何かなわけですが、僕はそれを会話として感じていて、例えばソロで踊るときは風との、音楽なら音楽との会話。今回は照明さん、衣装さんも含め各分野のスペシャリストの方たちが素晴らしいので、その皆さんとの会話だと思っています。照明が変わったら踊りも変わったり、茂呂さんや福田さんの演奏に影響されたりとか、それらもやっぱり会話なので、自分も答える。どっちかだけではなくその場のライブ感、お客さんが入ってきたらお客さんとの会話にもなっていくわけで、いい意味で会場全体と会話して、生まれてくるものを大事にしたいというのと、見世物として、公演として、作品としてとなった時に、決まりというか、作っていく作業も同時に楽しんでいきたいと思っていて、今回はたくさん曲を用意していただいている中で、自分の中で振り付けをしたいと思っている曲があるので、即興になる部分と毎回同じ動き踊りをする部分のバランスもありつつ、ただ振り付けしたからといって毎回同じにはならず、動きは同じかもしれないですが、その質感だったり感覚は毎日変化していくんだろうなと思うと、とてもライブ感、生物、舞台の作品としても今回は会場に足を運んでくれた人たちだけが味わえる、その瞬間だけのアートになると思い、今リハーサルに臨んでいます。

・・・ライブ感で思い浮かんだのが、橘さんは普段はどちらかというと静止的な形で作品を表現されているわけですが、その作品がライブに投影されるということで感じておられることはありますか。

橘　何と言っても一人で考えていることを余裕で超えていくことの喜びが一番大きいですね。大喜利のお題を出したような喜びです。こう問いかけたら皆さんはどう表現されるんだろう、というクイズを出しているような楽しさ。それでいながらムードや雰囲気は、先に絵があることで自然と浸透して伝わった上でやってくださっているのかな、と感じたりもするので。普段は読者からの反応は時間がたってから読者カードやメールでいただくのですが、反応がその都度見られるのは、ずるいくらいの喜びですね。作っている段階からすでに私の中では舞台は始まっちゃってるというか、公演の7日間の前からとっくに始まっているという感じです。制作過程からリハーサルで音楽も聴けるし、ダンスも見続けられるわけですから。ものすごく贅沢ですね。

▲橘さんが本作のために描かれた絵

・・・福田さんは札幌のみならずベルリンをも拠点とされ、また世界のさまざまな地を訪ねて音楽を作っておられますが、それもまた一つの美の追求なのかもしれませんね。

福田　私はいつも大事な作曲をする時はベルリンのスタジオに篭ります。必要な取材や、気持ちを創作に向けるために国内だけでなく必要とあらば世界中を放浪して、知識と感性が満ちたところで足早にベルリンに駆け込む。そうやって生まれた楽曲とストーリーの新芽を素晴らしい共演者、こころ強いスタッフと共に少しずつ成長と変化させて、見応えのある大樹のような作品をお届けできたら嬉しく思います。触発を繰り返し、感性を共鳴させ合うことの尊さを改めて感じる貴重な機会でもありました。

・・・茂呂さんはこれまでにも様々なスタイルのアーティストとのコラボレーションをなさっています。また新たな顔ぶれで作品を作られるにあたって感じていることはありますか。

茂呂　舞台の作り方にも型があるわけではなく、そこで生まれたアイデアで、共通意識で"これだよね"、とみんなに響くところがあるんですよね。だから、ジャンルにとらわれずやはり表現って「人」だと思います。人との出会いでどんなことが生まれるのかって。もしかしたら、女性が命を産み出せるように、私たちもアートというものできっと何かが産めているんだなと思えるんですよね。それも一対一で向かい合って産むもの、自分に向かい合って産めるものがあって。時計台という場所で、時間というものを、一週間違うものを一緒に過ごす……こういうテーマにワクワクドキドキしながら作っているこの時間こそがまさに宝なわけで、3年に1回の「札幌国際芸術祭」で自分を出し切って、響き合ったものが何か心に残って、また次のスタートを切れるんですよね。とても刹那的な、限られた時間の中で、全力を出して自分の表現を超えていく時間を過ごせる。自分一人で向かい合うことは日頃みんながやっているわけですから、ここに集ったからこそできることを探していく、そういうことに豊かさがあるんだなと思います。

▲リハーサルの光景

いま、そしてこれから私たちが伝えたいこと

・・・皆さんの活動の舞台であるこの北海道は、様々な文化が息づき生まれる土地です。本作の会場となる時計台は創建以来文化発信の拠点であり続けてきましたし、本公演は「札幌国際芸術祭2017」と連携して開催されます。また、来年は北海道命名150年を迎えます。2017年のいま、そしてこれから、様々な表現者が集う北海道でやっていきたいこと、するべきことはなんでしょうか?

茂呂　地球人、日本人、北海道民……どの角度から言っても、文化を発信するということは、私はひとつの「戦い」でもあり、最も大事なことだと思っています。物質的な社会の限界を迎えて、なおかつ生き方というものに何か迷っていて。心の時代に入って、生きている肉体を持った心をどのようにコントロールし、何に向かっていけばいいのかということに迷っているんですよね。だから奪ったり、相手を攻撃したりすることによって自分を正当化する、こういう社会に対して向かい合う。そういう部分で、自分の中で目の前にある出会い、表現を通じて未来に向かって光を放つことができるんだと、これだけ実際に表現も多種多

様ある中で、新しく生んでいくということが最も大事なんですね。新しく生むということは各ジャンルで限界が必ずあるんです。もちろん超えていくことが大事ですが、それは技術的なものになってしまうんです、どうしても。そうではなくクリエイティブというものは出会い、刺激から視野を広げ多様な角度を見出すことだと思います。なので、こういう時間が私はとても大好きです。
北海道はとても豊かだと思います。四季がはっきりしていて。そこにこれだけ多種多様な、世界でも活躍するアーティストがいる。でも、一緒にやろうということが今まではあまりなかったのですが、舞台ではそれができる。そういう新しい舞台の、表現の作り方に私はこの地で挑戦していきたい。第一回の挑戦を3年前に行って一定の評価を得ましたが、今度は違う作り方ができないかと思った時に、この素晴らしいメンバーに出会えて舞台を作れることを幸せに思っています。
今やらなければいけないことは、今は型があるわけではないのだから、まずは進んでみるということだと思います。北海道は文化を語るにはまだ早いとも言われますが、実践しないといけないわけで。それを楽しみながらやれたらと思っています。

▲瞬間をダンスで形にしていく鈴木さん

鈴木　今はいろいろなジャンルや人たちの中でも転換期で、人間の生活、アートやダンスシーンもこの数年でガラッと変わって、新しい時代に入ったと思っています。そこで豊かになったことと、失ったことがある中で、僕自身も去年まで東京に住んでいたのですが、今年帰ってきて、北海道でやっていきたいと強く思って、すぐに茂呂さんにお会いしてこの話をいただいたことは、自分の中で今年30代に入って色々なことが変わっていく中で、運命の道しるべを感じている舞台でもあります。
地球や北海道、自然が持っているエネルギーに寄り添って、どんどん豊かになっていくべきだと思うんです。北海道の持っているエネルギーと自分の持っているエネルギーを寄り添うようにしていくことで、それはうまくいくと思っています。自分の生活、今の環境を見失わず、人と接すること、様々な出会いを大事に、周りの人たちと一緒にいいエネルギーを持って向かっていけたらと感じています。
橘　私も20年近く東京で生活して、それはそれで非常に刺激的だし面白いことだったのですが、東日本大震災で揺れている間に、"あ、死ぬかもな"って思ったんです。その時、やりたいことをやらないとまずいな、と本当に思って。人って本当に死んじゃうんだな、とリアルに感じました。その時、一度札幌に住んでみたいという思いがあったので、実行しないとダメだと。恐怖心もあったのですが、行ってみようと思いました。実際に住んでみたら、いかに自分が東京の生活の中で心が飽和していたかということに気づかされました。自分から心のあり方を変えたいと思っても、東京の速い生活サイクルの中では自力で変えるのは結構難しくって。でも、こちらに来て、ふと藻岩山を見たり、山からすーっと下りてくる風を感じたり、ちょっと遠出して、怖いくらいの大自然を見たり……ということを体験すると、人間って簡単に変われる。心とは外側の風景を映す鏡だと思いました。心って自分でどうにかできるものではなくて、環境によって映し込むものが変わると心も変わる、自然物だということを感じました。北海道の大地が持つ圧倒的なバイブレーションやエネルギーを受けると、創作が本当にスムーズなんです、びっくりするくらい。やっと地面に足の裏をしっかりつけて生きているという実感を得られた気がします。こちらには真剣に深く関わっていける人間関係が多いなと感じています。私は札幌という街がとっても好きなので、ここで得ているものをいかに自分の中で循環して作品を通して返していくか、ということを今は考えています。
福田　自分たちが居る場所にどんな社会が在って、それが形成されるまでの歴史やコミュニケーションの足跡に興味を持つことが大事だと思います。それらがアーティストの解釈や哲学で表現され、身近で楽しめるものにしたのが今回のパフォーマンスだと思います。
「北海道から何を感じましたか？」……そのシンプルな問いかけに全力で挑んだ今作から、美しさや恐怖、喜びや悲しみなど心に訪れる彩りを共有していただけたら幸せです。
・・・鈴木さんも橘さんも福田さんも、北海道を出て暮らす経験をされたからこそ、今この北海道で表現する中で感じることがあるのですね。茂呂さんもパリでの公演を実現され、もしかしたら外から北海道を考える機会になったのではと思いますが、その経験も踏まえて、『盲目のサロルンカムイ』とこれから先、茂呂さんの見ていきたいものをお聞かせください。
茂呂　北海道の音、色、表現……は、それぞれの"点"はあるけれども概念としてまだ固まっていないものだからこそ、やりがいがあると思っています。パリや東京に吹く風や住む人の意識は、そこに行くことで感じることができる一方で、北海道に来た時に"それそれ！"と感じられるようなものはまだあまりないなぁと思っていて。もっと北海道の空気感を表現して、総合的な舞台を作りたいと思っています。この舞台を見てくれた北海道の方が地元の色や空気を重ねてくれたり、道外・海外から来てくれた方が「これが北海道なんだ」と思えるようなものを、一日一日違うものとして見せていけたらと思っています。
私たちが作り上げているものはまだまだ完成形ではなく、今持っている自分たちの通過点をここで出して、何かそこで実感できればいいなぁと。私は是非この舞台を道外にも発信したいと思っています。いずれパリや、南仏のアヴィニヨンの国際演劇祭のような舞台で、北海道の空気を発信できたら、なんて素敵だろうと。この大地のエネルギーを実際に感じてみたくなって、北海道で再演するときに道内外、海外からたくさん来てくれて……こうした循環ができることによって、私たちがこの地で表現を続けることでふるさとのお役に立てるのかなと思っています。
目の前の時間を楽しみつつ、5年後、10年後にこの舞台が成長していけばいいなと願っています。

・・・皆さんが"多面体"だからこそ、一つの舞台に集まったときに輝きを持って形になるという予感を感じました。これがまさに5年後、10年後にどのような輝きをもっていくのかが楽しみです。
ともに表現者として、多面性の中にある美しさを拾い上げて形にしていけたらと思っています。
まだまだたくさんの光を放っている人が北海道にはいると思うので、この作品がその輝きのつながりを作っていくきっかけを作り、そして7日間の公演を観る人にも投げかけるものになってくれたらと願っております。

5～7ページのインタヴューでご紹介した公演『盲目のサロルンカムイ』は、9月25日(月)から10月1日(日)までの7日間、札幌時計台ホール(札幌時計台2階)で開催されます。ぜひお誘い合わせの上ご来場ください。

●主演

踊り　鈴木 明倫
演奏　DJEMP
　　茂呂 剛伸 縄文太鼓・ジャンベ
　　福田 ハジメ 作曲・ピアノ

●出演

演奏　澤口 勝　石田 しろ　佐藤 夕香
　　川村 怜子　山本 祥人　一宮 直
　　井尻 逸大　石橋 俊一　高野 麻美
声　木村 功
原案・プロデュース　DJEMP
作曲　DJEMP
絵・文・美術　橘 春香
照明　秋野 良太
衣装　松下 奈未
音響　佐々木 隆介

●チケット 全席自由席

一般	¥3,500
CD付チケット	¥5,000
学生(大学・専門・高校)	¥2,500
学生(小学校・中学校)	¥1,500
全公演通し券(CD付)	¥15,000
オリジナルCD	¥2,000

●お問い合わせ

オフィスモロ
Tel 011-200-2112／Fax 011-200-2113
E-Mail moro-t@mirai-t.com

主催 MMSマンションマネージメントサービス
共催 オフィスモロ／札幌市時計台舞台2017実行委員会
企画構成・運営 オフィスモロ
後援 北洋銀行／北海道新聞社／HTB北海道テレビ／北海道マツダ販売／未来通商
協力 北の縄文道民会議／北海道シマフクロウの会
特別協力 プリズム

みんなで叩くおもしろさ

"Jomon-Taiko" Players Voice

Part 2

2017年の本誌では、3号に亘って茂呂の門下メンバーの声をお届けしています。出会いのきっかけや多彩な活動を「みんなで叩くおもしろさ」という切り口で、そして自身の活動や生活とジャンベのつながりやこれからやりたいことを「ジャンベ・縄文太鼓＋〇〇」として語っていただきます。

	佐藤 夕香	井尻 逸大	一宮 ナオ
太鼓を始めたきっかけはなんでしたか？	民族雑貨のお店のジャンベの音に惹かれて。その突き抜ける綺麗な音に衝撃を受けました。小さいジャンベを購入したのですが、どうやって叩いたらよいのかもわからず、インテリアとして家に飾っていました(笑)。その後もずっとやってみたいという想いは変わらずにいたのですが、やっぱりやりたいことをやろう！と思い立ち、友人と一緒に、当時茂呂先生が講師を務めていた道新文化センターのジャンベレッスンに通い始めたのがきっかけです。	抽象的に言えば"全体性の回復"のため。それまでの人生は、言葉と数字だけの頭でっかちな人生でした。そんな生き方に疑問を持ち始めていた約4年前、宗家のKitara及びその直後の奥井理(みがく)ギャラリーでの演奏に衝撃を受け、そこで言葉によらない"身体・音楽表現"としての太鼓に、冒頭のキーワードの問いに対する答えの可能性があるのではないかと思い、"まねぶ"ことを始めてみました。	あるパーティで、茂呂先生の演奏を聴いて、ものすごい衝撃を受け、感動しました。大きな音なのにとってもまあるい優しい音、そして音の粒を感じ、心が躍るワクワク感がありました。結婚パーティで、先生は亡くなった父をイメージした曲を披露して下さり、なんとも言えないご縁を感じました。ジャンベを習いたいと思っていたある日、夫がジャンベをプレゼントしてくれて、二人で先生にジャンベを習ったのがきっかけです。
太鼓の魅力とは？	どんな人でも年齢も関係なく、初めて太鼓に触れる方から経験者まで同時に楽しむ事の出来る楽器だと強く感じます。その反面、シンプルゆえに物凄く奥が深い点も魅力です。クリアな音を出したいと思うと、叩くときの手の角度や力の入り方などタッチに気を付けなければいけません。また自分自身の"気"をお客様に届けているような感覚があり、まさに『自分の手を楽器にする』という先生の言葉の通りだなと、日々の活動を通じて実感します。	"パッション"をストレートに表現できる可能性をもったツール。月並みですが初期のアプローチは容易(ここが重要)だが、奥行きは極めて深い。	叩くと、響く。個体ごとに違う響きと味がある。音のバイブレーションを身体で、肌で感じることができる。聴くのも本当に心地よいですが、叩いているととっても気持が良いです。いろんな自分を出してくれる楽器です。またイラストやデザインで絵を描くことに「ライヴ感」を感じながら行うようになりました。お話しするようにたたいたり、仲間と音やリズムで気持をやりとりしたり、創りあげたり。まだまだ沢山の魅力がありそうでワクワクしています。
ジャンベ・縄文太鼓＋〇〇 あなたにとっての太鼓の活動、その現在と未来	自分自身を知るためのツールでもあり、自己表現のひとつです。しかし自分の為だけではなく、人に希望や光を与えられるような活動が出来たら嬉しく思います。まだ始めて間もない中、友人・知人でもないお客様から誉めていただいた事、自分にも人に何かを与えられる事が出来ると知った時の感動は忘れられません。服飾の学校を出た経験を活かして、いつか衣装や舞台装置など、総合的な舞台を創り上げてみたいという想いがあります。	聞き手に、なんらかの感情を想起させる。それもできるだけ心の根源に達する強烈なものを。それが最終目標。	習い始めた頃は「自分を表現するためのジャンベ」でしたが、続けていくごとに「何をどう伝えたら良いか？」「伝えるって、どんなこと？」とか、アンサンブルでの「自分の立ち位置、やるべきこと、目標」などを意識するようになってきました。太鼓と向き合い、仲間と一緒に成長し、自分の環境とフィットさせながら、優しくも強いものをつくっていきたいと思います。個人的な目標は、他の楽器やダンスとのコラボレーションを実現したいです。
茂呂先生ってどんな人？	技術や経験や知識や想いを惜しみなく伝えてくれる、愛を持った人。色々な顔を持った魅力的で面白い人です。それでいて、近い様で遠い存在。先生と同じ目線で物事を考えられる様になれたら、その手に近づく事が出来たら、もっともっと楽しめるのではないかと思います。	音楽家、教育者、プロデューサー、コーディネーター等々、多面的な顔をもつ"稀有な人"。それぞれの分野で優れた人は、札幌にもいると思いますが、少なくとも、これら全てを一定水準以上持つ人間をこの地において、私は知りません。	常に新しい世界を切り開いていく先生。ものすごくパワフルで、それでいて繊細なところまで見えているのがスゴい！と思います。演奏会の本番の時のパワーと器に、いつもエネルギーをいただいています。音へのこだわりとお客様への想いをものすごく感じます。
最高の演奏ステージはどこですか？	ホールなどの大箱での演奏や、大好きな美術館やギャラリーでの演奏。そして北海道だけではなく道外、または海外での演奏も経験してみたいです。舞台の大きさは関係なく、太鼓を担いでどこへでも。言葉を越えてこの太鼓の素晴らしさを伝えられたらと思います。	一人でも熱心に聞いて頂ける方がいる場所、状況で演奏できること、それが全て。	今までの中では、北海道新幹線開業祝賀会での演奏です。難しいリズムも披露しましたが、会場のお客さまたちも歓びにあふれ、言葉にならないほど素晴らしい時間をいただきました。これからの目標も、そんな歓びと音が交歓しあうような最高のステージをつくっていくために、仲間たちと楽しみながらジャンベと向き合い、心と身体で表現していきたいです。

茂呂剛伸後援会2周年祝賀会 総会／活動報告会

2017/4/1(土) 札幌パークホテル

4月1日(土)、札幌パークホテル(札幌市中央区)で茂呂剛伸後援会の2周年を祝い、この一年のご報告の場を兼ね、総会を開催いたしました。当日は三味線奏者の菅野優斗さん、ダンサーの刈田順也さんをお迎えし、DJEMP(ジャンピ)との共演をお楽しみいただくとともに、日頃ご支援をいただいている各界の皆様からたくさんのお祝いと激励を頂戴いたしました。今年度もいいご報告をたくさんお知らせできますよう、茂呂をはじめ関係者一同、多彩な活動を積極的に続けてまいります。

『アフリカの仮面と彫像』オープニングコンサート

2017/4/22(土) 本郷新記念札幌彫刻美術館

4月22日(土)から6月14日(水)まで、本郷新記念札幌彫刻美術館(札幌市中央区)で企画展『アフリカの仮面と彫像』が開催され、門下メンバーの井尻逸大さん所蔵のコレクションも多数展示されました。開幕日には館内で同じくアフリカ発祥の楽器であるジャンベのライブも開催され、皆様に見るのみならず音で、響きでも展示を堪能していただくことができました。茂呂及びメンバーによる各地での演奏活動もその数をますます増やしておりますので、お近くで開催の折にはぜひ足をお運びください。

北の街に熱い冬がやってくる!

今年も12月に「Contemporary Djembe Festival」(コンテンポラリー・ジャンベ・フェスティバル)が札幌で開催されます。
2012年から毎年秋から冬にかけて開催しているこのイベントは、西アフリカ発祥の民族楽器「ジャンベ」を新たなコミュニケーションツールとして現代社会に一層普及させていくことを目的としており、コンクールとスペシャルライブなどで構成しています。参加者はジャンベを通じて自らの表現を楽しみ、追求し、その喜びの輪を広げることを共通の喜びとしています。そして、誰かと演奏技術を競い争うことが本来の目的ではなく、ジャンベを打つ、その手を楽器として成長させ、自らの演奏で聴衆を喜ばせることが最大の目的です。昨年9月に開催された「CDF」でも、コンクールの熱き戦いとプレイヤーたちの交歓が繰り広げられました。今年は年の暮れの開催です。雪降る札幌に吹く熱風のような音をぜひ体感にお越しください。

2017年12月9日(土) 札幌市教育文化会館 1階小ホール

予選／開場14:30 開演15:00　本選／開場17:30 開演18:00

入場料：予選／¥1,000 小・中学生¥500　本選／¥2,000 小・中学生¥1,000 小学生未満無料

チケットお申し込み・お問い合わせ：cdf.official1@gmail.com

詳しくはFacebookページ [Cdf (コンテンポラリー・ジャンベ・フェスティバル)] もご覧ください

information

後援会からのお知らせ
最新の情報は茂呂剛伸Webサイト・Facebookをご覧ください

今年も大晦日～年越しは札幌時計台で!
時計台ジルベスターコンサート2017-2018 開催決定

昨年の大晦日から今年の元日にかけてたくさんの皆様のご来場を賜りました「時計台ジルベスターコンサート」を、今年も開催させていただきます。
昨年はピアニストのhajimeさん、三味線の菅野優斗さん、アイヌ伝統音楽の川上さやかさんをお迎えしました。
本誌5～8ページでご紹介の公演『盲目のサロルンカムイ』もこの時計台ホールで行いますが、今年の締めくくりも、ゆく年を送り、来る年を寿ぐ時間を、札幌の時を刻み続けてきた時計台で皆様とご一緒できれば幸いです。
●12月31日 公演時間・回数及び出演者ラインナップは決まり次第お知らせいたします
●会場…札幌時計台ホール(札幌市中央区北1条西2丁目 札幌時計台2階)

詳細は決定次第、こちらでお知らせいたします。
■Webサイト…http://www.goshinmoro.com/
■Facebook…https://www.facebook.com/goshin.moro ([茂呂 剛伸]で検索)

編集後記

いつもご愛読下さいまして、ありがとうございます。そして、今号のお届け、大変お待たせいたしました。今年度は7月に開催したパリ公演をはじめ、おかげさまでこれまでにも増して大変多くの活動をさせていただいております。今号ではページを4ページ増やし、パリ公演の模様やこれから開催する公演・イベントに向けた記事を盛り込んでお届けすることといたしました。
今後も茂呂剛伸と門下メンバーの活動、親交のある方々との対談などを通じてより充実した内容を目指してまいりますので、よろしくご愛読のほどお願いいたします。
■vol.07…2018年1月下旬発行予定　＊内容・発行日は変更となる場合がございます
＊バックナンバー(vol.01～05)ならびに英語版(vol.01～03抜粋)・フランス語版(vol.01・03合併号／vol.02)をご希望の方は、事務局までお問い合わせください

茂呂剛伸後援会 ご入会のお誘い

縄文の響きを未来へ…そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう2015年4月に発足したのが「茂呂剛伸後援会」です。
本会報のお届けやイベントへのご案内、チケットの優先販売等の会員特典がございますので、是非ご入会いただきますようお願い申し上げます。
【入会のお問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール moro-t@mirai-t.com ＊茂呂剛伸後援会ご入会の旨、タイトルにお書き添えください

Goshin Moro
Supporters Club
News Letter
茂呂剛伸後援会 会報 第6号
2017年9月20日発行

発行者　茂呂剛伸後援会事務局
発行所　茂呂剛伸後援会
064-0804
札幌市中央区南4条西1丁目15-2 栗林ビル7階
株式会社オフィスモロ 内
TEL 011-200-2112
FAX 011-200-2113
moro-t@mirai-t.com
www.goshinmoro.com
デザイン ウリュウ ユウキ(クリエイティブワークス19761012)